

平成 28 年(2016 年) 2 月 12 日
SNW・SNW 東北 矢野歳和

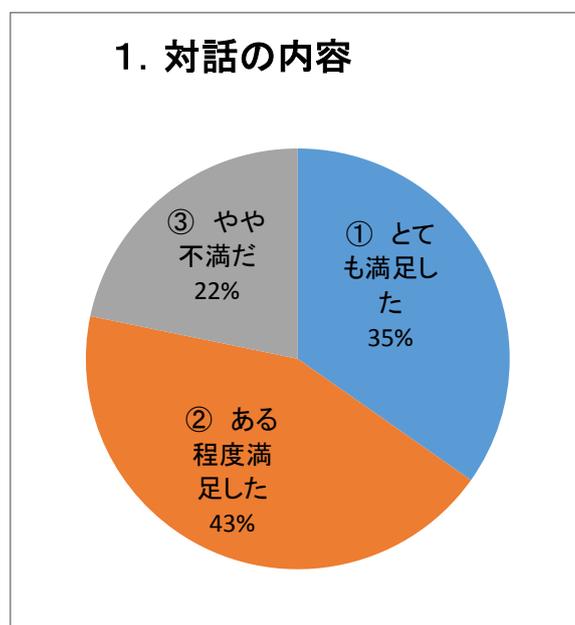
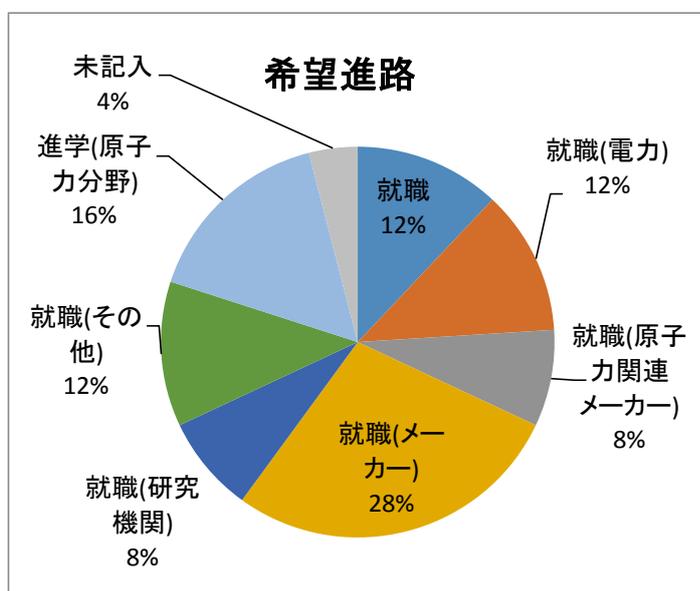
アンケートまとめ報告 「学生とシニアとの対話 in 東北大学 FY2015」

日時： 平成 28 年(2016 年) 1 月 22 日 (金) 13:00~18:00
場所： 東北大学青葉山キャンパス 量子エネルギー工学学舎
参加学生：28 名 (修士 1 年 22 名、学部 4 年 6 名) 学生幹事 DC1 笹川剛氏

I. アンケート回答

学生母集団

- ・ M1 19 名 B4 4 名 回答 23 名
出席 28 名 回答率 82%
- ・ 希望就職先は電力、原子力メーカー、研究機関、原子力関連進学が計 48% 原子力以外が 52%

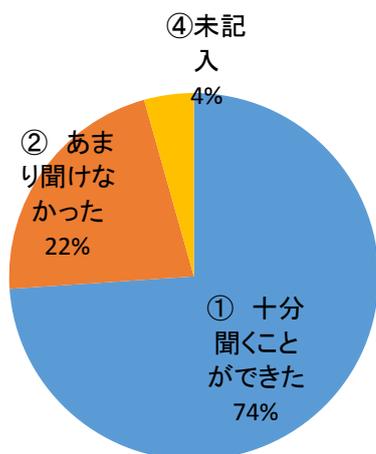


II. アンケート結果

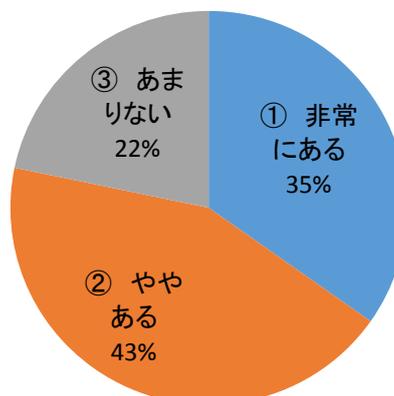
1. 対話の内容は満足いくものでしたか？

十分満足およびある程度満足の回答が合計 78%で対話の効果が確認できた。しかし昨年の 90%よりは減少した。シニアの原子力業界での経験が学生にとって新鮮に受け止められた。原子力分野の現状に対する認識が間違っていなかったこと、原子力が担う役割や重要性を確認したことなど、原子力を専攻する学生にとっては最も必要なことを再認識したのは良かった。今後は如何に積極的な学生を伸ばすかに注力すべきであろう。

2. 聞きたいことは聞いたか



4. 対話の必要性



2. 事前に聞きたいと思っていたことは聞けましたか？

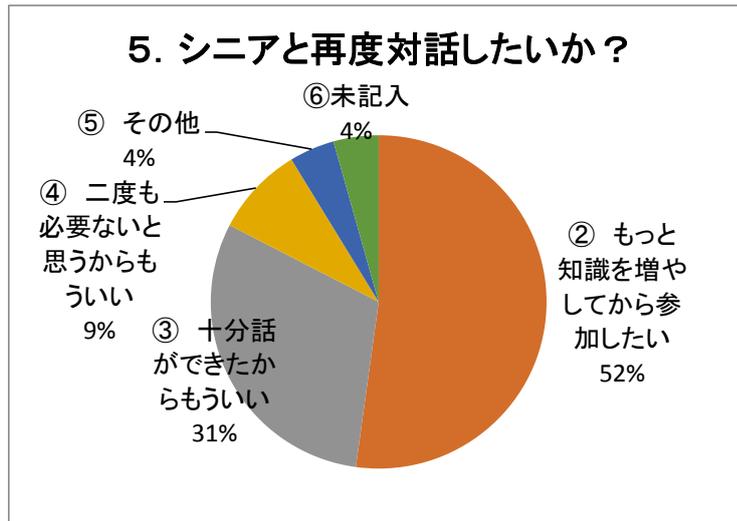
事前の質疑応答がかなり前から準備され 74%が満足している。事前のメールによる質疑で多くが明確になっており、逆にいえば盛り上がり欠ける部分がある。学生が事前調査を行い、それに対して質問することも一つの方法である。シニアの方同士で熱い議論を交わしており、学生が入る余地が無かったというのは反省材料だ。

3. 今回の対話で得られたことは何ですか？

ベース電源としての原子力の重要性を再確認できたこと、現在の世論のままだと原子力産業が衰退してしまうこと、日本経済繁栄の為に単価の安い原子力が不可欠であり、エネルギーセキュリティの認識も理解できたようだ。当然ながら原子力に対する正しい理解とそれをうまく伝えていくことの重要性を知っている。ただ原子力の必要性は理解しているが、一般社会に受け入れ難いという認識を持っていることに危惧感を抱いた。やはりマスコミや反社会勢力の論調に影響を受けている。マスコミに反証できるシニアの活動は重要であると思う。

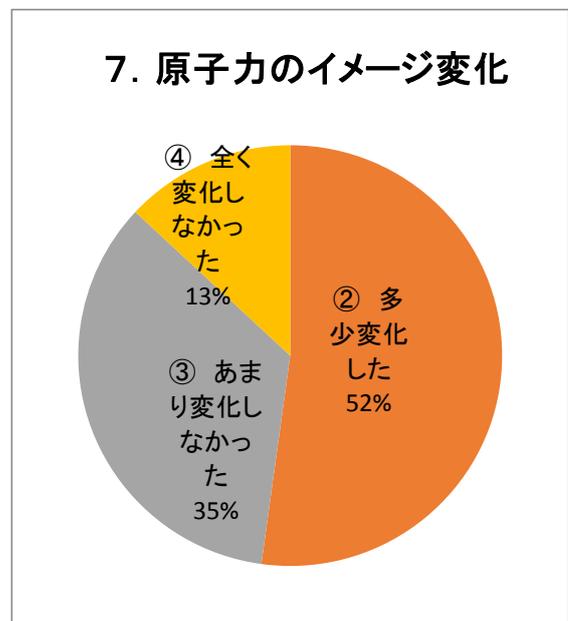
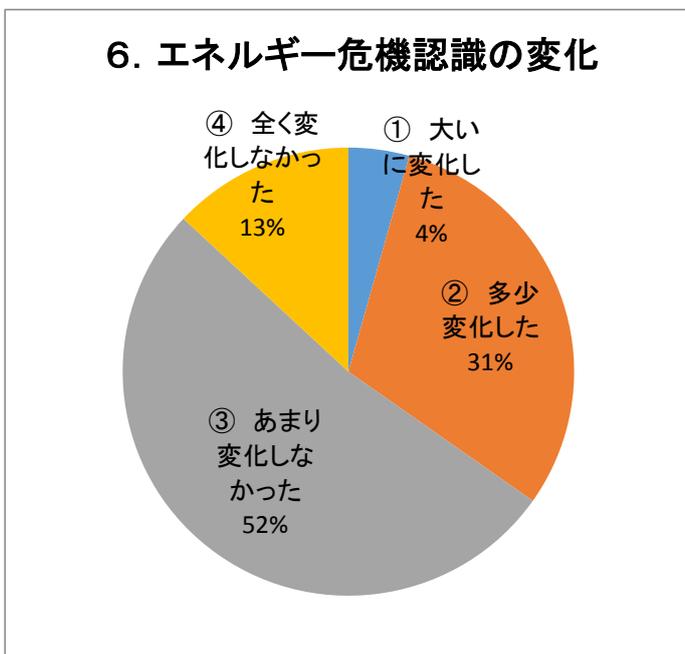
4. 「学生とシニアとの対話」の必要性についてどのように感じますか？

対話の必要性が非常にある、およびややあるとの回答は計 78%あり、シニアからの現場の声や黎明期から実業を推進してきたパワーは若い学生にとっても刺激になっている。シニアとの対話は大学と原子力に係わる社会との接点になる。



5. 今後、機会があれば再度シニアとの対話に参加したいと思いますか？

「もっと知識を増やしてから参加したい」と「十分話ができたらもういい」で 83%あり学生には刺激になったと思われる。ただし「もっと知識を増やしてから参加したい」に限っては前回から減少した。これは「もっと知識をつけた状態で対話できればよかった」という意味である。これは学生にとっても永遠の課題であり、今後とも一層勉学や研究に励んで頂きたいが、現時点の対話を通してそこから飛躍して頂きたいので何ら問題ではない。反省材料としてシニア側からも魅力ある提案と対処が必要となる。また設問は単純に有意義か必要性を感じないかの設問でもいいと思う。

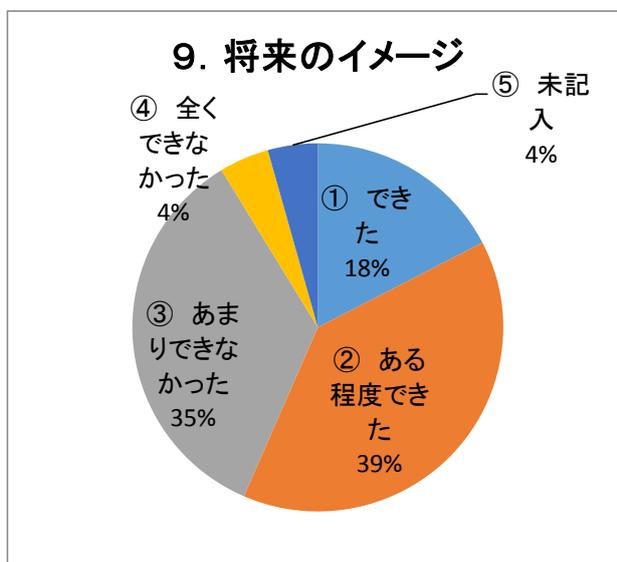
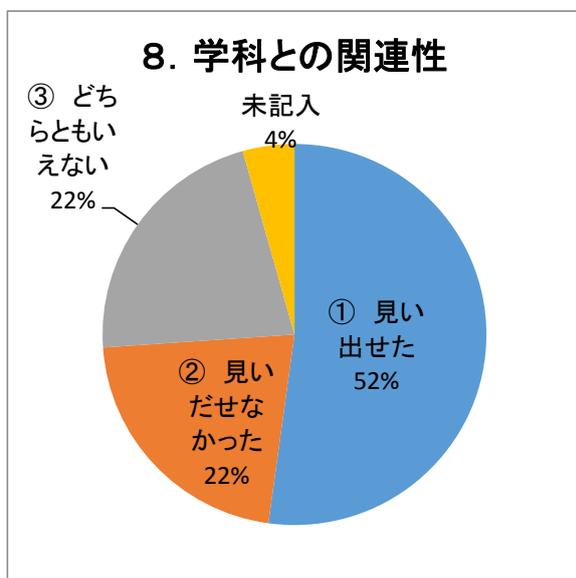


6. エネルギー危機に対する認識に変化はありましたか？

エネルギーや環境問題の必要性、もんじゅなど将来に対する布石などは積極的に考えており、シニアとの対話で再認識した。一方、エネルギー危機の認識があまり変化しなかったとの記述は、もともと今回の対象者が原子力エネルギーの専門科目を履修しているため既知の部分が多いためと推測できる。

7. 原子力に対するイメージに変化はありましたか？

原子力分野が発展することが日本の技術力の強化につながることで、規制側との対応など技術面以外の部分の課題がわかったこと、原子力の必要性、安全面の保障などを理解して前進させることができた、など効果があった。原子力の発展のため社会的受容性を高めることを認識しているが、彼らにはそこを乗り越えるリーダーシップを発揮して頂きたい。



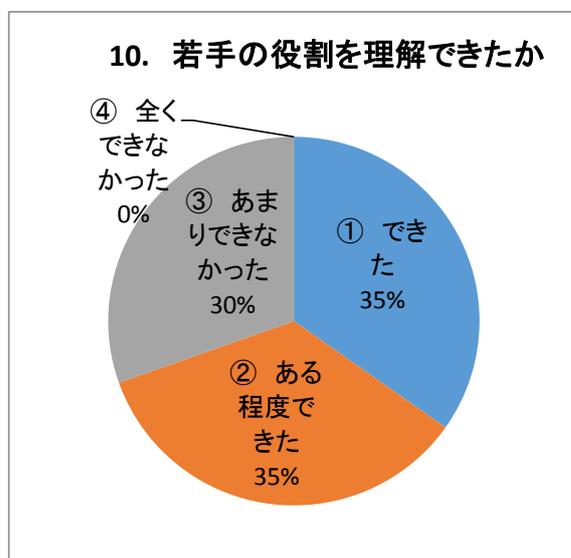
8. 今回の対話で自分の学科との関連性を見出すことができましたか？

原子力関連施設の安全運用に関し訓練方法や操作のしやすいインターフェースの開発、地下水と廃棄物との反応、原子力プラント構造材の腐食、バックエンド事業など自分の研究に関連している部分が多く再認識をした。

9. 対話の内容から将来のイメージができましたか？

原子力が再稼働に向けて進んでいること、シニアが予想以上に将来の原子力に対して明るいイメージを持っていること、企業で働く姿勢を知ったこと、国際的に見た原子力産業の大切さを学んだこと、国外の原子力産業の動向、またそれに対する日本の企業の対応等を知ったことなど良い反応があった。一方、将来の

イメージができないと言い原子力関連に進むか悩んでいるといいながらも、少なくとも世界の原子力の現状と日本における重要性を確認できたこと、将来はシニアのように自分の仕事に情熱と責任を持って取り組みたいと感じたことなどは教育的な効果もあった。



10. 対話の中でシニアが思う若手の役割を理解できましたか？

原子力に対して正しい情報と認識を持って、日本の将来の原子力産業を支える人材になってほしいと若手への期待感は大いに伝わった。またリーダーシップを持って取り組むことを対話の中で理解したこと、自分で問題を見つけ解決する能力が必要なことを知った。

11. 自分が思っていた若手の役割とシニアの考えは違いましたか？どのような違いがありましたか？また、シニアの考えを聞くことで、自分の考えに変化はありましたか？

これからの原子力事業について前向きに取り組むことが日本のエネルギー問題や環境問題を解決することにつながることに、原子力の社会的受容性を高めることも若手に求めている、日本全体世界を中心にとらえ地域で働くこと、自分たちが原子力業界を担うとの再認識、原子力が日本に必要なことは必然的であること、原子力業界就職に一步引いていたがその考えを改め若い世代のやるべきことだと認識したなどの自覚を引き出すことができた。また自己分析能力やその能力に喜びを得る力および目標達成のための集中力も必要と頼もしい反応もあった。

1 2. 本企画を通して全体の感想・意見など

シニアとの話で想像と違う意見を耳にすることが多く、長年社会の中で働いた方々と直接話ができよかった、1つか2つの議題に絞って十分な時間を確保すること、今後研究を進めていく上で良い時刺激になったなど。

所感

シニアと学生との対話は高専、大学、大学院と広い分野で実施してきた。原子力に対する理解を得ることは共通している。今回は原子力専攻の学部と大学院の学生である。彼らには専門家として自覚を持って頂き、社会に出てからはリーダーシップを持って原子力利用に貢献して頂きたい。使命感を持って今から行動に移すことを期待している。その中で今回のシニアと学生の対話会は有意義であった。

以上